

神漢連 九詩期会 詩箋 【七言絶句】

語註・典故・作詩メモ		結句	転句	承句	起句	詩題
<p>七月八日 福島県いわき市に 国宝「白水阿弥陀堂」を訪れた。丁度 堂前の浄土庭園 一面の蓮の花が満開で感動した。</p> <p>香台―お寺 農農―なよやかなさま 窮郷―まずしいさと</p>	窮	裊	讚	香	<p>常磐岩槻白水阿弥陀堂 (元韻)</p>	
	郷	裊	佛	臺		
	名	蓮	心	静		
	刹	花	中	坐		
	緑	池	浄	忘		
	陰	面	六	塵		
	繁	満	根	煩		

その他のメモ				

読み下し文				
窮郷の名刹 緑陰 繁る	裊裊たる蓮花 池面に 満ちて	讚佛して 心中 六根を浄める	香台に正座して塵煩を忘れる	常磐岩槻 白水阿弥陀堂

作詩日	平成二十八年七月	平起式	名前	宇野次郎
-----	----------	-----	----	------

神漢連 九詩期会 詩箋 〔七言絶句〕

語註・典故・作詩メモ				結句	転句	承句	起句	詩題
季節の移り行く事とともにわが身の秋を感じさせられる齡となった。				白 ●	野 ●	迢 ○	半 ●	斜月
				嘲 ○	色 ●	遞 ●	輪 ○	
				痴 ○	経 ○	無 ○	斜 ○	
				老 ●	霜 ○	雲 ○	月 ●	(庚韻)
				鳥 ●	如 ○	驟 ●	故 ●	
				空 ○	白 ●	冷 ●	牽 ○	
				鳴 ◎	髪 ●	生 ◎	情 ◎	

作詩日 平成二十八年九月

平起式

名前

諸星暢義

その他のメモ
 やつと涼しさが感じられるようになり十一月に合わせて作詩してみました。

a			
痴老を自嘲すれば鳥空しく鳴く	野色霜を経て白髪の如し	迢遞雲無く驟冷生ず	半輪の斜月故に情を牽く

No 14

結		転		承		起	
雲	○	詣	△	鬱	△	山	○
散	●	來	○	梢	○	氣	●
霧	☆	葉	△	蓋	△	遮	☆
消	○	屋	●	宙	●	塵	○
胸	☆	醫	△	鳥	●	密	☆
裡	●	王	○	聲	○	寺	●
愁	◎	佛	●	幽	◎	秋	◎
雲散霧消す		詣て奉たる		鬱梢宙を		山氣塵を遮り	
胸裡へ		葉屋の		蓋宙を		密寺の	
愁い		醫王		鳥声		幽	
		仏		幽			

題
詣相州日向葉師

相州日向葉師を詣す

仄起式

「尤」韻

名前ニ平賀康隆

読み下し文

医王仏... 葉師如來の別名

日向葉師

伊勢分限する日向の仏像、日本ニテ平賀康隆の
本首子葉師如來の他、重文の仏像多し、

神漢連 九詩期会 詩箋 [七言絶句]

語註・典故・作詩メモ				
叢莎 草むら、 蛩響 コオロギの響き渡る鳴き声				

結句	轉句	承句	起句	詩題
叢 ○	爽 ●	独 ●	雨 ●	初秋吟
莎 ○	気 ●	座 ●	余 ○	
蛩 ○	何 ●	幽 ○	茅 ○	
響 ●	來 ○	窓 ○	屋 ●	(庚韻)
尽 ●	詩 ○	風 ○	日 ●	
秋 ○	酒 ●	露 ●	西 ○	
声 ◎	友 ●	生 ◎	傾 ◎	

その他のメモ				

読み下し文				
叢莎 <small>そうさ</small> の蛩響 <small>きようきやう</small> 尽 <small>ことごとく</small> 秋声 <small>しゅうせい</small>	爽気 <small>そうき</small> 何れ <small>いず</small> よりか来 <small>き</small> たる詩酒 <small>ししゆ</small> の友 <small>とも</small>	独 <small>ひと</small> り座 <small>ざ</small> す幽窓 <small>ゆうそう</small> に風露 <small>かふうろ</small> 生 <small>しょう</small> ず	雨余 <small>うよ</small> の茅屋 <small>ぼうおく</small> 日は西 <small>にし</small> に傾 <small>かたむ</small> き	初秋吟 <small>しよしゅうぎん</small>

作詩日	平起式	名前
平成二十八年九月七日		
		古川 彌

神漢連 九詩期会 詩箋 【七言絶句】

語註・典故・作詩メモ				結句	転句	承句	起句	詩題
三浦海岸の花火を観て 金英 菊の花 煙花 繁華の喻え(花火) 朝生暮死 人生は短くて儂いこと				朝 ○	燃 ○	星 ○	金 ○	有感烟火
				生 ○	盡 ●	彩 ●	英 ○	
				暮 ●	煙 ○	漂 ○	能 ○	
				死 ●	花 ○	浮 ○	發 ●	
				滅 ●	君 ○	西 ○	踊 ●	(東韻)
				還 ○	莫 ●	復 ●	高 ○	
				同 ◎	慨 ●	東 ◎	穹 ◎	

その他のメモ

読み下し文					作詩日	平起式	名前
朝生暮死	燃え尽くす煙花	星彩漂浮す	金英能く發き	烟火に感有り	平成二八年八月	平起式	松本祐輔
滅すること還同じき	君慨く莫れ	西復東	高穹に踊る				

結			転			承			起			題	平起式 〔先〕韻 名前南上清一郎
熊	○	△	莫		△	黄	○	△	誰	○	△		
城		○	以		●	鳥		●	云		○		
剝	●	△	震	●	△○	不	●	☆	火	●	△		
落		●	災		○○	知		○	國		●		
尚		●	憂	○	○○●	危	○	☆	白		●		
巍		○	舊	●	●○	急		●	雲		○		
然		◎	里		●●	傳		◎	邊		◎		
熊城剝落すれども尚巍然たり			震災を以て旧里を憂ふること莫れ			黄鳥知らずして危急伝ふ			誰か云はん火国白雲の辺				

読み下し文

神漢連 九詩期会 詩箋 [七言絶句]

結句	転句	承句	起句	詩題
蟬 ○	古 ●	山 ○	登 ○	立石寺
聲 ○	刹 ●	氣 ●	巖 ○	
閑 ●	堂 ○	清 ○	拭 ●	
寂 ●	前 ○	涼 ○	汗 ●	
入 ●	思 ○	絶 ●	仰 ●	(文韻)
岩 ○	往 ●	俗 ●	孤 ○	
聞 ◎	事 ●	氛 ◎	雲 ◎	

6月末、友人たちと東北旅行に行き、山形の山寺・立石寺へ寄った。芭蕉が『奥の細道』で「閑かさや岩にしみ入る蟬の声」と詠んだ所である。境内の看板には斎藤茂吉の歌「みちのくの仏の山のごとしごし」
 岩秀(いわほ)に立ちて汗ふきにけりもあつた。
 「ごとしごし」は岩がごつごつと重なってけわしいさま。
 「岩秀(いわほ)」というのは岩のてつべんの意味か。
 この二人の歌を詠みこんでやろうというのが今回の詩。

読み下し文

立石寺 りつしゃくじ	巖に登り汗を拭きて孤雲を仰ぐ いわのぼのあせをふきてこもろんをあおぐ	山氣清涼俗氣を断つ さんきせいりょうぞくふんをたつ	古刹堂前往事を思い こまじどうぜんおうじをおも	蟬声閑寂岩に入るを聞く せんせいかんじやくいわにいるをき
---------------	---------------------------------------	------------------------------	----------------------------	---------------------------------

作詩日	平仄式	平起式	名前
平成28年9月7日			山口 幸雄

その他のメモ
 さらに結句と承句は大正天皇「葉山即事」第一、二句「数声漁笛入風聞 海氣清涼絶俗氣」からいただいた。
 ビッグネームが三人―素人には無謀な試みであった。
 蟬声閑寂入岩聞 ↑最初はこれだったが、山氣清涼絶俗氣 いきなりネタバレではと拭汗巖頭天籟静 蟬声を最後にした。
 奥州古刹野花薰